

大学図書館の思い出

学 長 細 井 美 彦

実は40数年前に京都大学に入学したころ、大学図書館は遠い存在であった。当時は古い本のおいと難しい言葉で書かれた本に憧れたが、学生は専門書の書庫に入れず、事務の方にとって頂くのが少し面倒くさかった。学生で込み合うキャンパスの中で、図書館はいつも静かに佇んでおり、なかなか身近な存在にはならなかった。やがて、卒業論文を書くようになると、専門分野の図書室に向かい、本を借りてコピーしてぼろぼろになるまで読み、そして研究室の先輩に新しい論文が出たと聞かされると、必ず論文を見に図書館に行った。すると運悪く掲載刊が無かったり、購入してなかったりする。そこで事務室で論文のコピー取り寄せ申し込むか、その本があると言ううわさの大学の図書館に見に行くことになる。そこでも無いことが多く、帰りに喫茶店で専門書ならぬマンガを読む羽目となった。40年前は生命科学系論文が急激に増えはじめた頃で、国際誌の論文は国内では網羅的検索と入手が容易では無く、大学図書館や学部の持つ図書室は最新情報の入手先として重要性が高かった。

その頃、米国のジョンスホプキンス大学のWelch 医学図書館に行く機会があった。そこで専門書やJournal数の豊富さに圧倒され、落ち着いた自習室では利用者用にコーヒー&ドーナッツがあって驚き、研究に役立つメディカルイラストレーションの講座が開かれることをうらやましく思い、ユーザーフレンドリーなアメリカの図書館に素直に感動した。そして「日本の大学図書館もこうなって欲しいなあ」と思ったのを覚えている。

時を経て現在は、インターネットの普及に

より論文の入手は格段と容易になり、教育と研究の環境も大きく変わり研究者や学生の動線も変化した。ラーニングコモンズやキュレーターなど耳慣れぬ言葉とともに国内の大学図書館も変わった。アカデミックシアターの活用や図書館貴重書展の催しなど本学の図書館も活動の可能性を広げている。香散見草を読ませて頂くにつけ、世耕弘一先生が思いを馳せられたであろう梅の花の香りのように、図書館の新たな活動が冊子に掲載され、学生や教職員は言うまでも無く、学外の人々にも、新しい時代のあらゆる分野における知の香りを届けてくれることを期待している。